

上 家治兼右大將

く。師資拜戴して退く。次に 大納言殿右近衛大將御兼任の
 宣旨亂箱に入て。大炊少允某もちいて、大外記師資に授く。高
 家織田對馬守信榮傳へうけて御前にさしげ。少老水野登岐守
 忠見これをとれ收む。對馬守信榮亂箱をとりて退く。奏者番鳥
 居伊賀守忠意請とりて。前のごとく砂金を入て大外記師資に
 さづく。師資拜戴する事始のごとし。勅使をはじめ公卿みな
 退く。かくて 大納言殿帳臺に入給ふ。御所にはなをば
 じめの御座におはしませ。勅使。女院使。准后使次第に
 いて。此度慶賀の進らせ物捧げ奉る。御兼任の賀には 禁
 廷より御太刀。黄金三枚。 女院。 准后より金のく二
 種一荷。 親王より御太刀。黄金二枚。御兼任を賀せられて
 禁裡より二種一荷。 女院。 親王。 准后よりを
 のの一種一荷なり。御拜戴終りて帳臺に入給ふ。 大納言
 殿かされて上段に着たまへば。 勅使をはじめ女次第にいて、
 慶賀のしなく奉る。 禁廷より御兼任の御祝に御太刀。黄
 金三枚。 親王より御太刀。黄金一枚。 女院。 准后よ
 り金のく二種一荷。また御兼任の御祝には 禁廷より二
 種一荷。 女院。 親王。 准后よりをのく一種一荷
 なり。事ばて、 御所ふたたび上段に出給へば。攝家。宮門
 跡。勾當内侍の使臣をのく太刀。馬資。あるは扇等を献じて
 賀し奉る。公卿太刀目録奉りをのく慶賀しはて、退く。次に

下 江戸大火

國持四品以上普第外檢來をはじめ群臣みな拜謁し。吉田二位
 兼雄卿の使をはじめ使臣等ならびに右兵衛尉某。大炊少允某。
 公卿家司等まで見え奉りて後。左衛門尉忠寄かされて先導し。
 白木書院にうつり給ふ。三家溜詰拜賀し奉る。つきに黒木書院
 にて右衛門督宗武卿拜賀せられ奥に入給ふ。けふ堀重門は先
 手頭寺島又四郎尙包。庵所口中の口は平塚伊賀守為政。中門は
 福王忠左衛門信近をして警備せしむ。事ばて、 勅使の旅館
 に高家堀川兵部大輔廣之御使して鯛酒。 女院。 准后使の旅
 館には高家横瀬駿河守貞隆して鹽麴酒樽をくりたまふ。また
 此日より 大納言殿の御事 右大將殿と稱し奉るべし
 と仰いださる。この夜丑の刻赤坂今井谷より失火して。南は品
 川八山。北は田町あたり及び。日記。後見草。○五日小笠
 原伊豫守忠總代参うけ給はり。阿部飛騨守正允は 右大將
 殿代参使奉はりて。けふをのく暇賜はり日光山におもむき。
 御兼任の告祭せしむ。忠總には御馬を賜はる。夜戌の刻ごろに
 神田の邊より火をこりしが。折ふし戌亥の風つよく。火勢次第
 にさかんになりて。柳原佐久間町の市塵を延焼し。凡圍園をや
 くこと千町ばかりにてつめに深川に及び。その邊の神祠佛宇
 ものこりなくやけ。大橋永代橋もみな焼はるびぬ。(日記。後見
 草。○七日公卿慶應の猿樂あるべしと定められしに。大火を
 もて停廢せらる。是日また増上寺より火をこり田町まで焼た

り。 有徳院殿のとき火災を憂ひ給ひ。府内の茅茨を禁停し
 瓦屋につくりあらためさせ給ひしより後。四五十年來大なる
 火事なかりしかば。四民こころゆたかにをのくその業をた
 のしみけるが。このたびの大災市井多く財寶を失ひ。生産にまよ
 ふ者多かりしとぞ。(日記。後見草。○八日寄合水野主膳忠體
 至心院殿御法會の警衛命せらる。(日記。○九日六條參議中
 將有榮卿。五辻治部卿盛仲卿。樋口三位其康卿。左衛門三位泰
 邦卿東叡三縁兩山の 諸卿に参拜あり。(日記。○十一日堀
 田相摸守正亮日光山告祭の御つかひ奉はり。羽織并に馬を給
 ひ。 右大將殿より八丈島袖十反。 藤中御方より羽二重
 十反か下さる。勘定市川莊左衛門佳野孝免して小普請となる。
 褒銀例のごとし。(日記。○十二日公卿辭見あり。 禁廷をは
 じめかたぐいに歳首の御返詞。御轉兼の御謝詞仰進らせらる。
 けふ柳原前大納言光綱卿。藤橋前大納言勝胤卿におのく銀
 二百枚。綿百把。 右大將殿より各銀百枚。御兼任の御慶に
 は光綱卿。勝胤卿に銀五百枚。時ふく三十。六條參議中將有榮
 卿。五辻治部卿盛仲卿には銀二百枚。時服十。樋口三位其康卿。
 土御門三位泰邦卿にはをのく御百枚。時服十。堀小路大外記
 師資には銀三十枚。時服二。青木大炊少允には銀十枚。時ふく
 四。粟津右兵衛尉には銀二十枚。時服二かつげらる。 右大
 將殿御兼任の御祝には兩相に銀三百枚綿二百把。六條參議

中將。五辻治部卿には銀百枚綿百把づゝ。樋口。土御門兩三位
 には銀百枚。時ふく六。大外記師資には銀二十枚。時ふく二。青
 木には十枚。二を賜ふ。また 准后宣下。 親王宣下の御
 祝には。兩傳奏に巻物三十。 右大將殿より二十。攝家。宮門
 跡。公卿の使臣。家司。諸工に各銀時服若干を賜ふ。また阿野少
 將實組。柳原右少弁紀光。大宮兵部權大輔貞季に鹿陸料百俵づ
 つ賜ふ。この日堀井門跡叙仁法親王。一乘院門跡尊映法親王。
 梅溪少將通賢使して太刀目録奉り。このたびの慶賀を聞え上奉
 る。(日記。○十三日公卿慶宴ありて猿樂を見せしめらる。
 兩御所共に長の御はかまめして。高島近江守廣行。天野阿波守
 忠邦御刀の役し。松平有京大夫輝高先導して大席間に出たま
 ふ。公卿をはじめ群臣拜謁す。少老小出信濃守英持申樂始むべ
 きよしをつたふ。けふの樂は翁。三番叟。鶴龜。風流。弓入。幡。開
 口それ國津かぜ治りて。生榮ぬる松がえに。千とせの春をなら
 べすむ。鶴の毛衣色はへて。めてたかりける時とかや。田村。羽
 衣。紅葉狩。祝言。狂言。二番。すゑ廣がり。栗焼。奏者番土井大炊
 頭利里猿樂の者らに唐織時服を纏頭し要脚を賜ふ。けふ府内
 の市人にも見ることをゆるされしかば。をのく酒菓錢をた
 まふ。(日記。○十四日公卿府を發して歸洛あり。(日記。○十五
 日三家をはじめ群臣兩城に出仕して御轉兼を慶賀し。十万石
 以上一種一荷。摘子并に致仕の人々もおなじ。万石已上一種

づ。三千石已上は太刀馬資を献す。萬石以下病氣幼年致仕のものに使用して太刀目録を献じ。在封は後に使もて奉る。右大將殿にもおなじ。又万石已上より 藤中御方にも一種一荷。または標香の料奉る事差あり。今朝 右大將殿つれの御座所にて御對面あり。互に太刀馬資をもて賀せらる。右衛門督の方も出仕して太刀目録を献せられ。刑部卿。宮内卿には病によて使もて奉らる。此日松平右近將監武元御使して。右大將御兼任の御賀に太刀。馬資金三枚。巻物卅。三種二荷。御兼任の御賀に給百把。二種二荷。 藤中御方には女房御使して。御兼任により巻物十。二種一荷。御兼任により二種一荷進らせらる。 右大將殿よりには御兼任を賀せられ。御太刀。馬資金二枚。給百把。三種二荷。又御兼任の御賀には給百把。二種一荷奉り給ふ。御使は秋元但馬守涼朝なり。又 藤中御かたには女房御使し。御兼任の慶賀に巻の二種一荷をくらせ給ふ。 藤中御方よりは御兼任の御祝に二種一荷。御兼任に巻物五。二種一荷。 右大將殿へ御兼任により二種一荷。御兼任により巻物五。一種一荷奉らる。田安には西尾隱岐守忠尙。一橋には松平右京大夫輝高清水には隱岐守忠尙御使し。なのの時服廿遺はさる。竹姫御方。法心院尼。蓮淨院尼よりも物奉り慶賀あり。其使に銀賜ふ。先手頭芝山小兵衛正武盜賊考察を命ぜらる。また氷川明神の祠に御側稻葉越中守正明。山

王權現には 右大將殿より御側巨勢大和守利啓代參す。(日記)○十六日御轉兼の御祝に猿樂あり。三家を始め國持。蒲詰等に見せしめらる。巻の二種一荷を賜ふ。申樂は翁。三番叟。老松。籠。東北。船辨慶。祝言岩舟。狂言二番。秋大名。福の神なり。奏者番牧野越中守貞長纏頭沙汰する。例の如し。此日本城より尾紀兩邸に御使して時服三十づ。水邸に二十。尾紀兩世子も同じ。西城より尾紀兩邸に二十。水邸并に兩世子に十づ。道はさる。松平加賀守重教。松平大隅守繼忠に本城より廿づ。西城より十づ。賜ふ。(日記)○十七日紅葉山 御宮に西尾隱岐守忠尙代參す。けふ小笠原伊豫守忠總。阿部飛騨守正九日光山より歸謁す。(日記)○十八日又慶宴の散樂を雁菊の間詰者。并に諸職のともがらに散樂を拜覽せしめらる。 右大將殿のみ表に出給ふ。樂は翁。三番叟。維波。忠度。江口。張良。祝言養老。狂言二番。いくの。釣狐なり。(日記)○十九日散樂きのふのごとし。げふも 右大將殿のみのぞみ給ふ。翁。三番叟。東方朔。實盛。六浦。鉢木。祝言金札。狂言二番。八幡前。千鳥なり。今朝土井大炊頭利里が邸より失火す。よて高家。雁問詰。奏者番出仕して御氣色をうかひ。三家は使奉らる。(日記)○廿日東叡山 有徳院殿靈廟に松平右近將監武元代參し。銀三十枚進薦せらる。これたびの慶事によりてなり。 右大將殿より秋元但馬守涼朝代參す。(日記)○廿一日日光門跡公啓法親

井伊直定 宗方照幸

王をはじめ増上寺大僧正定月。金地院元坊。護持院光星。觀理院樂範。樹下民部永成。大乘院實乘等に饗たまひ申樂を見せしめらる。翁。三番叟。加茂。兼平。槍頭。正尊。狸々。亂。狂言二番。惠比須毘沙門。昆布賣なり。けふ堀田相摸守正亮日光山よりかへり謁す。また高家前田信濃守長泰ことさらの仰ことありて。京の御使にさしれ支用金三百兩をたまふ。(是御隱退の御事とぞきこえし)日光門跡に高家戸田遠江守氏富御使して。こたびの慶賀により紗綾二十卷。一種一荷。 右大將殿より紗綾十卷。一種進らせられ。隨意院准后公選法親王には巻物十。一種。 右大將殿より五卷。一種をくらせ給ふ。(日記)○廿三日 至心院殿十三年周忌御法會東叡山にて行はれ。衆僧して經五百部をよましむ。これ 右大將殿より取行はせらる。所なり。この日致仕井伊大監物直定うせぬるにより。其子掃部頭直幸のもとに奏者番酒井飛騨守忠香して。香火料銀三十枚を賜ふ。又致仕宗民部大輔方照も幸しければ。その孫對馬守義番がもとに奏者番牧野越中守貞長して。香資銀三十枚を給ふ。(日記)○廿四日東叡山 深徳院殿靈廟所に少老板倉佐渡守勝清代參し。銀十枚進薦せらる。これ御轉任ありしによてなり。また 至心院殿御法會により。日光門跡のもとに 右大將殿より少老酒井石見守忠休して。槍重一箱をくらせらる。(日記)○廿五日 至心院殿の靈廟所にかたより香

料献せらる。事例のごとし。久我前右大臣通兄公。千種參議中將有補卿。梅溪少將通賢朝臣。金剛院僧正實恕。成身院僧正演春。覺勝院權僧正實淳。勾當内侍。榮松院尼など其御なからひなるをよて。香資を進薦せり。赦行はる。事例におなじ。(日記)○廿六日 至心院殿靈廟所に少老松平攝津守忠恒代參し。香資銀五十枚進薦せられ。 右大將殿より秋元但馬守涼朝代參す。又御兼任をもて更に少老酒井石見守忠休して告祭せしめらる。布施物賜はる。事又例のごとし。(日記)○廿七日 右大將殿長袴つけ給ひて。東叡山 至心院殿靈廟所に詣給ふ。(日記)○廿八日三線山 天英院殿靈廟所に松平右京大夫輝高代參す。この日書院番頭花房近江守職朝大番頭となり。百人組頭本多左京忠榮書院番頭となり。火消役柴田七九郎康平小姓組番頭となり。牧野半右衛門忠知百人組頭となり。寄合齋藤左門三益。大久保善十郎教和火消役となる。又 藤中御方吹上御庭に御遊覽あり。(日記)○廿九日堀田相摸守正亮こたびの慶事つかさどりしをよて。時服十。元弘の御刀を賜ひ。 右大將殿より時服五。兼信の御刀を下さる。其他の宿老には時服十づ。秋元但馬守涼朝も同じ。御側用人大岡出雲守忠光は時服七。本城西城少老。御側には四づ。小姓組番頭格竹本越前守正章。西城小姓組番頭格水野豐後守忠友には三づ。小姓。小納戸。奥醫にはすべて銀三百枚を賜ふ。 右大

將殿より宿老に時服五、但馬守涼朝にも同じ。山雲守忠光には四。本城西城少老。御側に三つ。越前守正章。豊後守忠友には二つ。をたまふ。この日西本願寺門跡光顯。新門光顯。東本願寺門跡光顯をの、使もて太刀馬資の金奉り御轉兼を賀す。増上寺大僧正定月より使して昆布献じ慶賀し奉る。(日記)

○晦日三縁山 有章院殿靈廟に西尾隱岐守忠尙代参す。(日記) ○この月町奉行に令し下されしは。市井に盜賊入しとき。その所にて召捕へ奉行所に訴ふべきに。盜賊考察の司に捕へ出はあるまじき事ながら。若心たがへして奉行所にうたへず捕へたるものを。放ちやらん事も有べければ。盜賊考察にうたへ出る共めしとらふべしとなり。(監教類典) ○三月朔日月なみ例の如し。松平殿岐守頼恭御轉任の御謝使奉はり。松平肥後守容頌は御兼任御謝使奉はり。高家織田對馬守信榮。山長播磨守貞整さしぞひ命せられ。前田出雲守支長は 右大將殿よりの御謝使命せられいと賜ふ。御轉任御謝儀は 禁廷に風長の御太刀一口。綿五百把。銀千枚。 女院に銀三百枚。綿二百把。 親王に太刀一口。綿二百把。銀三百枚。 准后に銀三百枚。綿二百把。御兼任の御謝儀に 禁廷に太刀一口。綿五十疋。銀三百枚。 女院に銀百枚。綿二十疋。 親王に太刀一口。綿二十疋。銀百枚。 准后に銀百枚。綿二十把。 右大將殿よりは御みづからの御謝儀として。 禁廷に正恒

御太刀一口。綿百匹。銀五百枚。 女院に銀二百枚。綿三十疋。 親王に太刀一口。綿三十疋。銀二百枚。 准后に銀二百枚。綿三十疋。御轉任の御謝儀は 禁廷に三種二荷。 女院に二種一荷。 准后に二種一荷。 慶中御方よりは 禁廷に銀百枚。 女院。 親王。 准后にの、銀三十枚を進らせらる。また御轉任の御祝として。近衛關白内前公に太刀一口。銀百枚。傳奏兩卿に太刀一口。金一枚づつ。勾當内侍に銀五十枚。その他 内の女房に銀百枚。 女院女房に百枚。 春宮女房に三十枚。 准后の女房に百枚つかはさる。御兼任の御祝には關白に太刀一口。銀五十枚。内侍に二十枚。 右大將殿よりは關白に太刀一口。銀五十枚。傳奏に太刀一口。金一枚づつ。内侍に銀三十枚。 内女房に二百枚。 春宮女房に二十枚。 女院女房に五十枚。 准后の女房にも五十枚つかはさる。又松平筑前守繼高はじめ就封のいとまたまふ者八人。駿府城代久世長門守廣寛赴任のいとま下さる。此日三家をはじめ万石以上のともがらに。 御所年ごろ御多病におはしますにより。 右大將殿に御世ゆづらせ給はんとの御むれを内々仰くださる。よて留守居市川出雲守清源。伊丹兵衛頭直賢。目付大久保亮之助忠興。新見又四郎正榮。萩原主水正雅忠。京極兵部高直御隠退の事ども司とるべしと命せらる。又日光門跡三家より上巳を祝して物奉らる。紀伊中

下 老中西尾 忠尙卒 上 關人入貢

上 二丸上棟

下 池田政方 致仕

將重倫卿とめの式行はれしにより。酒さかなを献せらる。また入貢の關人御覽あり。貢物は狸々緋一種。大羅紗八種。小羅紗二種。縮布八種。海黄二種。金唐革一種。酒二種なり。(日記) ○三日上巳慶賀例のことし。紀伊中將重倫卿とめありしをもて熨斗龜をつかはさる。高家前田信濃守長泰京御使のいとまくださる。(日記) ○四日二丸營築成功して上棟行はる。よて松平右京大夫輝高。御側用人大岡出雲守忠光。少老板倉佐渡守勝清。御側田沼主殿頭意次をはじめ。このと奉はりしものみな監臨す。(日記) ○五日菟間縁頼詰大久保伊勢守往忠に御轉任の御祝として時服一襲を賜ふ。是 深徳院殿の御兄なれば。かかる御事ありしなるべし。又槍奉行小笠原經殿助持慶が嫡孫民部持易。書院番杉浦吉右衛門勝信が子小姓下野守勝興をはじめ。父死してその子家つぐもの六人。(日記) ○六日關人にとまを賜ひ時服三十疋さる。 右大將殿より二十賜ふ。條約を讀聞しむる事例のことし。(日記) ○八日日付大岡吉次郎忠移。三枝帶刀守明。たびの嘉禮つかさどりしをもて。時服一襲を賜ふ。その他右筆の徒にも賜物差あり。儒役林大學頭信言。その子内記信愛。徳力藤八郎良彌。儒員人見七之助稱。林百助信有。評定所儒深尾權左衛門元徳。土田清助貞仍。青木文藏敦書。林宇兵衛信亮賀章奉りしをもて各時服たまふ。西尾隱岐守忠尙病危篤なるをもて。小納戸丸毛中務少輔政恭御使して精

濟鯛を賜はる。(日記) ○十日宿老西尾隱岐守忠尙卒す。よて甘樂を停廢する事三日。(日記) ○十一日群臣出仕して御けしきをうかひふ。西尾隱岐守忠尙が事によりてなり。國持外様より宿老。御側用人。少老の邸に使をくり。在封は書簡奉ること例のことし。(日記) ○十二日西尾隱岐守忠尙が子主水正忠齋がもとに少老小出信濃守英持御使して。香資銀三千枚をたまひ祭奠せらる。(日記) ○十三日水戸宰相宗翰卿出仕して。さきに御慶事のとぎ物賜りしを謝せらる。(日記) ○十四日備前國岡山支封池田信濃守政方致仕し。その子兵部政香をして所領二万五千石をつがしむ。この政方實は一族織部由利が二男なりしが。元文二年八月廿四日故内匠頭政尙が養子となり。十一月十五日初見し。三年二月十六日家つき。四年十二月十六日叙爵して信濃守と稱し。けふ致仕して大内記に改め。安永元年七月廿一日剃髮して長閑齋と號す。寛政三年十二月十九日卒す。年七十九。(日記) 藩翰譜續編) ○十五日次例のことし。石川主殿頭總慶が子吉六總執。那須養福原内匠資記が子昔之助資宣はじめて見参す。近衛關白内前公使して養女定婚を謝せられ。京極上總太守公仁親王使して婚姻を謝せらる。専修寺門跡圓遊馬資銀を献じて御轉兼を賀す。(日記) ○十六日さきに流刑に定りし多賀夜左衛門いまだ獄屋にありしが。此ほど火災のとすき放りやりしに。すみやかに歸り來りしかば。罪一等を減じて

追放せらる。(日記)○十七日御轉乘をもて紅葉山 御宮に

兩御所とも参らせ給ふ。御束帶なり。松平右近將監武元。

松平右京大夫輝高等豫参し。土屋能登守篤直。板倉美濃守勝武等あまた行列し。使番谷縫殿助轉衛丹羽五左衛門長利等六人御隨身して。右京大夫輝高先導し。御座は右近將監武元。御太刀は島山紀伊守國祐。御刀は松平縫殿頭忠香。御香は太澤紀伊守時眠なり。右大將殿御座の役上におなじ。前田伊豆守長敦御太刀。三宅伊賀守康俱御刀。伊藤志摩守忠勤御香の役す。歸らせたまひて後右衛門督宗武卿。刑部卿宗尹卿。宮内卿重好卿参拜せらる。(日記)○十八日光門跡西城の後閣にて

藤中御方に見え給ふ。(日記)○廿日東叡山 右徳院殿靈廟に松平右京大夫輝高代参す。(日記)○廿二日奏者番兼寺社奉行鳥居伊賀守忠意少老となる。西城御側小堀土佐守政方寺社奉行命ぜられ五千石の官秩を賜ふ。この日三家はじめ歳暮を祝して服奉りし人々に御内書を頒布せらる。右大將殿よりは奉書なり。(日記)○廿三日五十の御賀筵をひらかる。よて一荷進らせ給ひ。藤中御方よりは紅白縮緬。二種一荷まいらせたまふ。三家井松平陸奥守重村。松平仙之助よりは鮮鯛を奉る。また松平右京大夫輝高御使して。右大將殿に巻物二種一荷。藤中御方に紅白縮緬十卷。二種一荷を進ら

上 寺社奉行 鳥居忠意 若年寄 小堀政方 賀重五十

下 堀田正亮 之加封

下 若年寄板倉勝清 御側用人

せらる。右衛門督宗武卿。刑部卿宗尹卿。宮内卿重好卿一種一荷。壽丸の方。豐之助方には鮮鯛を遣さる。又御賀の詩歌あまたの内。藤中の御方の御詠。畏くも君が恵に万民千代も榮行すまでひさしき。日光門跡公啓法親王。未ながき友となる。美竹のちひろに千代の春をちぎりて。閑院太宰帥典仁親王。色かへぬ世々に千とせのはなもななこめてぞちぎれ庭の矣竹。これをはじめ内外の諸臣醫員女房に至るまで。なのをのたてまつりしとぞ。この日 御宮。靈廟に新筵を進薦せらる。(日記)○廿四日東叡山 深徳院殿靈廟所に少老小堀和泉守政峰代参す。西城小姓組に入番十一人。同じ書院番に應せられ。供奉の輩にもおなじく饗を賜ふ。此日林大學頭信官が子内記信愛に父が職事見習ふべしと命ぜらる。(日記。家譜)○廿九日三緑山 有堂院殿靈廟に松平右近將監武元代参す。(日記)○四月朔日月次拜賀なし。この日御隠退ありて右大將殿に大政を譲らるべき由。宿老して出仕の群臣に仰下さる。三家庶流井に松平加賀守重教。溜詰には御座所にて賜たまふ。高家長澤源守資祐日光山 御宮告祭御使奉はりていとまなたまふ。宿老堀田相摸守正亮一万石の加封せらる。秋元但馬守涼朝は 右大將殿木城にうつらせ給ふのち。連署のこと奉るべしと命ぜられ。少老板倉佐渡守勝清は 右

上 小野忠見 小堀政峰 酒井忠休 任若年寄

下 置西城徒士一組

大將殿の御側用人となり。從四位下にのぼり。水野豊岐守忠見は本城の少老になり。小堀和泉守政峰。酒井石見守忠休は西城の少老になり。西城小姓組番頭格水野豊後守忠友は 右大將殿御側となり。中次の事を奉はる。御側佐野右兵衛尉茂承は西城御側になり。中次のことつかまつる。大番頭森川下總守俊因。小姓組番頭小笠原上總介政方西城御側となり。普請奉行稻葉出羽守正武大目付になり。小姓組番頭格竹木越前守正章普請奉行になり。中奥番士倉橋三左衛門久雄西城徒頭になり。書院番頭岡部筑前守長晴。武田越前守信村。秋田大和守季通。戸田豊前守政甫。小姓組番頭巨勢日向守至忠。横山伊豆守清章。松平内匠頭康隆。大久保因幡守忠翰。留守居松平玄蕃頭忠陸。大澤越中守勝岑。河野長門守通延。小笠原出羽守常喜。新番頭高井飛騨守直隆。柳生播磨守久壽。旗奉行高山安左衛門紀通。鑓奉行伊奈友之助忠貞。持弓頭内藤民部信庸。持筒頭杉浦綱一。郎貞隣。先手頭土岐左兵衛佐朝直。原田兵部種春。松平源大夫定爲。糟谷彦兵衛義矩。岡山新十郎之英。松平忠左衛門勝周。目付藏原主水正雅忠。竹中彦八郎元祖。細井金右衛門正利。天野三郎右衛門康幸。小菅猪右衛門武策。京極兵部高直。書院番組頭能勢十次郎頼種。逸見八左衛門義次。伊勢平八郎貞恒。石尾七兵衛氏記。小姓組典頭神保新五左衛門長勝。小長谷喜太郎政芳。宅間與右衛門良豊。三島喜右衛門政申。裏門番頭富澤

小兵衛利成。柳澤源七郎安弘。川口頼母信友。大澤傳左衛門定雄。徒頭石野八大夫範至。菅沼主膳正虎常。保々藤助貞武。淺井小右衛門元武。徳山甲斐守貞明。小十人頭仙石監物政啓。太田庄右衛門資久。山本彌五右衛門正以。長谷川主膳正直。納戸頭平岡仁右衛門資摸。河野又四郎通純。奥右筆組頭山中新八郎廣亮。御隠退の後西城につかへ奉るべしと命ぜらる。廣敷用人松浦求馬信秀。植村八郎右衛門正苗。野澤伴次郎清庸は西城にうつり。藤中御方用人加藤甚兵衛正隣。角南内藏助國庸。新家興五左衛門孝之は本城にうつるべしとなり。この仙兩城の諸職相たがひに轉換するものあまたあり。また西城徒士一組をあらたに設ける。けふ溜詰井伊掃部頭直幸。宿老堀田相摸守正亮して。朝會せる輩に仰下されしは。御所年來御多病にましますゆへ。いまだ御老年にはなり給はずといへども。天下の政務 右大將殿に譲らせられ。西城に御隠退あり。右大將殿本城御移せらるべきの旨京へも聞え参らせ。將軍宣下の事も仰つかはさるべければ。是迄の如く 右大將殿につかへ奉るべしとなり。また令せられしは。兩城の諸有司更替奉はりし輩。御移徙済せ給はぬうちには。今までの如く勤むべし。但し座班の事。西城より本城に轉せしはみな末座たるべしとなり。(日記。年表。禮典類纂)○二日群臣出仕してきのふ御隠退のこと仰いだされしを賀す。使者又は飛札まいらすこ

と例の(一)とし(日記)○三日父死してその子家つぐもの十人。
 (日記)○七日四城にわたらせ給ひ。右大將殿襲勝をす、
 め給ひ猿樂あり。高家雁間詰。奏者番はじめ。布衣以上群臣四
 城に出仕して。覽る事をゆるされ襲勝を賜ふ。樂は翁。三番曳。
 高砂。八島。龍田。道成寺。祝言。狂言二番。入間川。鞍馬詣なり。此
 御祝にて松平右近將監武元御使して。右大將殿に二種
 一荷を進らせらる。日光門跡公澄法親王登山近づきしかば。高
 家島山飛驒守義紀御使して時服なくらせらる(日記)○八日
 小姓山川下總守貞幹小納戸になる。こたびの慶事に猿樂つか
 ふまつりしものちに襲勝を賜ふ(日記)○十日日門儀別の御
 對面ありて襲せらる。高家長澤堂岐守資祐日光山より歸り謁
 す。また高家堀川兵部大輔廣之日光山 御宮代參を命ぜら
 れ。久世出雲守廣明は 靈廟の代參を命ぜられ。内藤丹波守
 政苗。松平備中守定靜は祭禮奉行にさゝれて共にいとま下さ
 る(日記)○十一日尾張中納言宗勝卿の元に酒井左衛門尉忠
 寄。松平右近將監武元御使して。息女九條左大臣尙實公の子内
 大臣道前公に定婚の御ゆるしあり。黃門父子まう登り謝せら
 る(日記)○十三日松平加賀守重教使して二種一荷奉り。御年
 滿を賀す。右大將殿には淺草のほとりに放鷹の御遊あり。
 こたび本城西城うつりかはらせたまふにより。二丸に御次宿
 あらせたまふといへども。群臣出仕する事ある時は西城に出

仕し。二丸には出仕に及ばず。また物奉ることも。すべて西城
 のにみ奉りて。二丸へはまいらすべからずと仰下さる(日記)
 ○十五日臨時の朝會あり。松平出羽守宗行をはじめ參觀十九
 人。松平仙之助はじめ見參す。使番内藤主税信就。小姓組跡
 部監物真秀大坂目付はて、歸り謁す。尾張中納言宗勝卿より
 使もて二種一荷奉られ。息女定婚を謝せらる(日記)○十七日
 兩御所紅葉山の 御宮に御參あり。豫參例のごとく。松
 平和泉守乘祐。大久保安藝守忠由はじめ。五位あまた兩御所に列
 り。先導は松平右近將監武元。御簾は松平右京大夫輝高。御太
 刀は島山飛驒守義紀。御刀は赤井安藝守忠島。御香杉浦下總守
 勝興役す。右大將殿御簾は秋元但馬守涼朝。御太刀は島山
 紀伊守國祐。御刀は松平主計頭乘季。御香は山川下總守貞幹奉
 る。御進拜例のごとし(日記)○十八日二丸落成しければ。宿
 老。御側用人。少老をはじめ。これにあづかりし諸臣監視す(日
 記)○十九日伊勢國西條領主有馬式部少輔氏恒遺領一萬石。
 その弟常吉氏房してつがしむ。この氏恒は堀大和守親藏が四
 男なりしが。故の備後守氏久子なかりしかば。養はれて世つき
 となり。寶曆七年四月朔日はじめて見參し。九年六月二日家つ
 ぎ。十二月七日叙爵して式部少輔と稱し。ことし二月廿四日廿
 二歳にてうせぬるなり。先手頭堀三左衛門直達病免して寄合
 となる(日記。藩翰譜續編)○廿日東叡山に御詣あり。酒井左

有馬氏恒

衛門尉忠寄。松平右近將監武元等豫參す。大猷院殿。
 嚴有院殿靈廟にては井伊掃部頭直季先導し。御刀は坂本遠江
 守直富。御香は日根野安房守高豐役し。常憲院殿。有
 德院殿靈廟にては先導松平右近將監武元。御刀は加藤伯耆守
 正胤。御香は岩本内膳正利奉る(日記)○廿一日日門歸寺あ
 りしかば。高家島山紀伊守國祐して慰勞せらる。高家堀川兵部
 大輔廣之日光山より歸り謁す。内藤丹波守政苗。松平備中守定
 靜祭禮奉行はて、歸り謁す。けふ少老松平藤津守忠恒より傳
 ふるは。宿老。御側用人。少老のもとに往來のうち。勝手通りと
 稱するともがら。りの贈物は受來りたれども。この後はうけ
 ざるべし。何事も 有德院殿御とき如くに。いづれもはか
 りあはせぬれば。其ころしてあるべしとなり。御側に物贈こ
 とも是におなじとなり。本多中務大輔忠盈二丸防火の事命ぜ
 らる。此のち火災あるときはその身人数引つれ。大手門外にあ
 りて。家人をして下乗の橋の邊に出しなき。指揮をまつべしと
 なり(日記)○廿三日林大學頭信言周易玩辭困學一部を献す。
 これさきにその子内記信愛がめし出されしを謝し奉りてな
 り(家譜)○廿四日東叡山 深德院殿靈廟所に少老島居伊
 賀守忠意代參す。久世出雲守廣明日光山よりかへり謁す。此日
 日門歸寺ありて後はじめ御對面あり(日記)○廿五日二丸
 にて日門地祭の修法あり。よて法規正のもとに酒井左衛門尉

忠寄御使して檢重をくらせらる。又 御宮。靈廟に新瓜
 茄を進賜せらる(日記)○廿六日東叡山 至心院殿靈廟所
 に四城より酒井石見守忠休代參す。松平謙岐守頼恭。松平肥後
 守容碩京より歸り謁す。茶亭綿。干鯛を奉る。高家堀川對馬守
 信榮。由良播磨守貞整。前田信濃守長泰同じく歸謁す。頼恭は
 中將。容碩は少將。信榮。貞整は從四位上。長泰は從四位下にの
 ぼる。これ 勅許にまかせられしとぞ聞えし。西城書院番頭
 岡部筑前守長階大番頭となり。新番頭小堀主税政展。小姓組番
 頭となり。小姓組頭有馬一學純意先手頭になる。また日門に
 高家長澤堂岐守資祐御使して銀二百枚。時服十。二種一荷進ら
 せらる。これ二丸地祭の修法つかふまつられしによりてなり。
 衆僧にも銀若干を賜ふ。この日遠江國横須賀城主西尾隱岐守
 忠尙が遺領三萬五千石を。その子主水正忠需して襲しめらる。
 此忠尙は故の隱岐守忠成が子にて。元祿九年十月廿八日わづ
 かに七歳にて始て見參す。十六年十二月廿一日從五位下に叙
 して播磨守と稱し。正徳三年七月廿三日家をつぎ。同じ八月三
 日遠江國より他國にいづる婦女あるときは。今切。氣賀。福島
 の關にいだす所の券。忠尙よりさづくべしと命ぜらる。同じ七
 日隱岐守と改稱し。享保四年二月大坂の加番にさしれ。八年十
 月ふたたびまで日光山 靈廟の代參つかふまつり。十二年
 かされて大坂の加番し。十四年四月 嚴有院殿五十年周忌

西尾忠尙

傳信院殿御實紀卷卅一 寶曆十年四月

の御法會行はるゝにより東叡山を齋齋し。その年九月みづから
 五日後に日光山にのぼり。御宮。靈廟を拜し奉る。十七
 年三月十五日奏者番になり。寺社の奉行をかぬ。十九年九月廿
 五日少老にうつる。元文四年御みづからの青雁の御給を賜は
 り。寛保元年四月。天英院殿御遺物として古今集一部。青磁香
 爐を下さる。延享二年九月初日四城の宿老にのぼり。五千石の
 加秩ありて三万石となり。鑓二本持すべきの御ゆるしあり。同
 月廿八日從四位下にすむ。十一月十一日。大御所より備
 前重直の御刀を拜賜す。三年五月十五日本城の人々とおなじ
 く連署すべきよし命ぜられ。九月初日侍從に任ず。四月初日
 大御所龜戸村のほとりに放鷹ありしとき黃鷹を下さる。五
 年二月母の喪にこもりしときまばく御吊慰あり。兩御
 所よりくさくの賜物あり。寛延二年十月十五日年頃の勅
 を褒せられ。五千石の増秩あり。四年七月十日。有徳院殿
 ぞられしとき。御遺物として狩野探幽が給がける掛幅を下さ
 る。同じ月十二日懇の仰事かうぶり。此後本城に伺公す。寶曆
 二年四月廿三日改めて連署の事仰下され。五月十三日。有
 徳院殿小祥の御法會を惣督し。十月九日。月光院殿の御遺
 物として狩野岑信齋る屏風を賜はる。六年五月には所司代松平
 右京大夫輝高をとまひ京にのぼり。内に参り。龍顔を
 拜し天盃給はり。其かへきに久能山にのぼり。御宮を拜し。

かの地修理のさまを査檢してかへる。かく年ころすこやかに
 つかふまつりしが。ことし三月二日城中にてはかに病を得。
 日毎に疲憊せしかば。謝職の事れぎれど。さらにあるまじき
 ことのみ仰下されて御ゆるしなく。近習の人々もて病とは
 せ給ふ事まばくありしかど。此三月十日七十一歳にてうせ
 ぬ。此事聞しめし。右大將殿にもことさらおしませたまひ。
 一族のものめして懇の御吊詞を賜はれり。(日記。藩翰譜續編。
 家譜。この忠尚はいかに公平なる本姓にて。御爲はさらな
 り。世のため人のためになるべき事ばかりしことごとくいと
 あまたあり。そが中にも寶曆七年六月十三日南部信濃守利雄
 献物使臣尾崎富右衛門奏者の謁をうけがはず。その事あらそ
 ひて目付の指揮にまたがはざりし時。とがめられて富右衛門
 はおしこめられし後。宿老等會議して。富右衛門殿中をばか
 らざるふるまひその罪輕からずとて。重く咎あるべきに定め
 られたりしに。忠尚のみ衆議に同せず。その失禮はいかゞなれ
 ども。かれ主家の格むかしにたがはむ事をなげき。身をすて
 争論せるは。あへてとがむべき者としがたし。われ朝の御
 爲に身力をつくしてつかふまつるも。かれがその主のために
 こころざしをつくすもおなじ事なり。忠あるものを罪しなば。
 いかて天下の政は立申べき。我等が所存はたゞ殿中をばか
 らず過言せしなのみとがめ。南部が家の格はふるきに復し給

上大岡忠光 卒

はらばまかるべきにやと申けるに。一坐の人々その公平なる
 議に服し。富右衛門はまげしをしめしのみにて。後献物は富
 右衛門使してまげ奉り。南部の家格は舊にふくされしとな
 り。雜事拾遺。○廿七日大番頭松平下野守麻倫。先手頭土岐左
 兵衛佐朝直共に病もて職ゆるされて寄合となる。此日また御
 側用人大岡出雲守忠光卒す。(日記。○廿八日月なみ例のこと
 し。宮内卿方傳役村上肥前守義方五百石増秩。勘定吟味役小野
 左大夫一吉二百俵加秩あり。宮内卿傳役永井主膳正武氏事し
 げくつかふまつるをもて。黄金。時服賜ふ。此日松平仙之助首
 服くはへられ。從四位下侍從に叙任し。御名の字賜はり。越前守
 重富と稱す。御盃下され介廣御刀を賜ふ。重富よりも備前國春
 光の刀。太刀。銀。巻物。馬を奉る。また秋元但馬守涼朝が養子玄
 蕃永朝。大目付筒井大和守忠雄養子主殿忠昌。勘定奉行石谷備
 後守清昌が子左内清定。目付鶴殿十郎左衛門長遠が子安太郎
 長宇。西城目付天野三郎右衛門康幸が子大膳康壽。使番徳永兵
 衛昌寛が子大太郎昌福。島居權之助忠余が子左太郎忠洪。土岐
 大學朝貞が子牛之丞朝恒。榊原左兵衛職尹が子門之丞職武。齋
 院番組頭池田數馬正胤が子彦之丞政永。西城書院番組頭伊勢
 平八郎貞恒が子多門貞慶。徒頭矢部能登守正教が子多宮正勝。
 田屋仙右衛門道堅が子幸左衛門道政。西城徒頭淺井小右衛門
 元武が子吉十郎元茂。小十人頭能勢助十郎頼壽が子吉左衛門

頼中。納戸頭渡邊綱次右衛門定利が子甚左衛門定安。小納戸田
 中左膳貞宣が子源五郎貞幹。永井大之丞直該が庄五郎直邦。寄
 合池田傳之助頼致が子織部直好。小出八十郎英孫養子式部英
 致。奥醫武田長春院信郷が子采女信復。河野松尾通頼が子良以
 通久。一橋用人鈴木彦八郎茂正が子安次郎正米をばじめ初見
 四十三人。(日記。○廿九日御轉兼により三緑山に御詣なり。酒
 井左衛門尉忠寄をばじめ豫參あまたあり。台徳院殿靈廟
 にては松平肥後守容頼先導し。高島近江守廣行御刀。稻葉伊勢
 守正武御香奉り。文昭院殿靈廟にては松平職岐守頼恭先
 導し。御刀は内藤飛騨守忠謀。御香小笠原志摩守政久役し。
 有章院殿にもおなじく詣給ふ。此日。右大將殿にも紅葉
 山。諸廟に御詣あり。(日記。○五月初日月次例の如し。美濃
 衆一人。信濃衆二人参り謁す。高木新兵衛篤貞が子修理貞藏は
 じめて見参す。日門より使して二種一荷を奉られ。端午を祝せ
 る。(日記。○二日端午を祝し三家はじめ。例の家々服奉る事
 例の如し。右大將殿にも同じ。西城小十人組に入番十二
 人。げふ仰下されしは。來る十三日兩城移りかはらせ給へば。
 右大將殿本城御移徒の日より。上と稱し奉り。將軍宣
 下の日より。公方と稱し奉るべし。御所西城御うつり
 の日より。大御所と稱し奉るべし。書翰には。兩御所と
 記すべし。御一方のときは。上。大御所と記すべし。將

優侍番臣

入との盛感なるべし。まかのみならず深宮の中にもみおはしまし給は。御庭弱にならせたまはむ。こゝろもとながらせたまひ。放鷹を催したまひ。しばく遠郊に狩せしめらる。また小菅といふ地に別殿をいとなみ。春秋の折にふれ。二日三日また四五日も御止宿せしめたまふ。またく深宮をなれたまふのみならず。秘蔵の娘難をもちかく見そなはしたまへとの御旨なりとぞ。御齡たけたまふにしたがひ。次第に御病多くならせられ。延享のはじめ御纏続の後も。朝會の外にはおほく後宮にのみおはしける。よて近習の臣といへども。常に見え奉るものまれなりしかば。御言行の傳ふる事いと少し。その頃の近習の物語に。公には御げづらせ給ふにも。あぶらなみみて用ひられれば。御髪も常にみだれ給ひ。御髪をもそらせ給はざれば。長くのびておはしける。朝會の日などは侍臣等御氣色をうかがひ。やうやくそり進らせしとぞ。かく御容をつくるはせ給はざりしかど。臨朝の御威容はすぐれてだかく見えさせ給ひければ。遠見の群臣畏服せしといへり。かつこのころほど近習のともがらも威儀を守りしは。むかしも今もためしすくなしとぞ。

家重不粧

公には平日後照にのみおはしければ。小姓。小納戸もいと暇がちなりしが。下局に休ひてある間も。みな端坐して怠惰のふるまひせしものなかりし。こは親しく。公の御威儀を瞻仰し

奉れば。そのつからかく成しとぞ。かれこれをもて殿正の御ありさまうかがひしるべきなり。

享保十年二月十三日宿老安藤對馬守信友に。嘉辰今月の四大字を御みづから書てたまふ。これは公いまだ。長福君と稱し奉りしほどのとなり。此對馬守は御幼年のほどより付そひ参らせしかば。ことに御親みおぼしめしけるとぞ。其子政藏病ありし時。對馬守御前に出ければ。政藏が病體れもころに導給ひ。病なぐさめむ爲とて。御みづから弱子をばじめくさくのものなたまはりける。またとしへてのち對馬守老衰せしさまを御覽じ。あはれませたまひ。養生の服餌せよとて黒餅を下さる。番臣を優遇したまふ盛意ありがたきといひたり。

大岡土佐守忠征書院番頭たりしとき。寶曆三年四月のころより難をわづらひ出し重くなやみければ。諸醫とかく人參をおほく服して元氣を補されば。治療とげがたしと申により。人參あまた用ゆるよし聞召。うちくの御氣色ありて。其物あまたまはりしとぞ。番頭など外様のともがらにかゝる賜物あるは。そのためし少きとなれば。一族等までも特旨をかしこみ奉りしといへり。

公いまだ。大納言殿と申けるころ。御佩刀をあらたに作らせられしに。其事奉はりし人。いかにもまて御心に應じ奉らんことを思ひばかりて。ふちかしらよりはじめ。古よりの名ある

好風雅

家重之仁愛

を獲び。金銀をちりばめ花やかによそひて奉りければ。御氣色よるしからず。かくよそひたるは人に見せて誇具となすものすることなり。我等の調度はたゞいさぎよくあらたなるをよしとす。人に示してほころべきにあらずとのたまひ。あらため作らしめ給ひしとぞ。御平常の寛厚に似合せたまはず。時にとりてはかゝる御果斷の御けしきともありしといへり。御多病にのみわたらせ給ひけれど。もまた風雅の御このみも有しとぞ。ことに木草の花を愛玩し給ふよしうけたまはりて。延享四年三月少老畑田加賀守正陳が淺草別荘の赤芳櫻の花咲しかば。折技を瓶にさし献りしに。めてさせたまふ餘り。おなじくはその木を根こじて。御庭にうつさせたまはんとの御旨なり。よて御側の用人大岡山雲守忠光うけたまはり。御庭の監倉地仁左衛門といふに令して見せしめられしに。この櫻いかに老樹なれば。もし移栽るときは生活せむと覺束なしと申ける。さうば薩苗なりとも参らすべしとて御庭に培養せられける。よて加賀守より春毎に折技にして奉るをめてさせ給ひしとなり。これより先加賀守はかの淺草の荘に住けるが。少老となり御所ちかきほとりにて別に邸宅下されしゆへに。先の莊はかへし春るべきためしなれど。寛永のむかし。大猷院殿臨駕まし／＼ける園庭なれば。残りなく他の人にかへ賜はらんと思ふまじとて。園ばかりは加賀守にそのまゝたまは

り今に傳ふ。百花を御愛賞ありとまりて。さまざまの盆花進らせて。御こゝろをなぐさめ奉るものおほかりき。ある日なにかし霖漆に蒔給したる器に。花を植て献りけり。人々もことさら御氣色にかなふべしと思ひ居しに。案に違ひて御けしきそんじ。凡草木はその花こそめづべけれ。うつはものをかざることはあるまじきなり。とに奢侈をひらくもとひとなるべしとて。まりぞけたまへり。ある日御饌を供し奉りしに。二の膳の杉角に手をふれ給ひながら。とりもあげたまはず。もとのまゝになし置せたまひしゆへ。配膳の人々いかなるものありしにやといふかり思ひたりしに。徹してのち査檢すれば。彼もの欠損したるところありしとぞ。こればもし御手にとらせ給ふて破るれば。其事にあづかる人々罪かうぶるべきと。御こゝろづかれて。いろはせ給はざりしならんと。人々其深仁の御こゝろを感じ奉れり。延享の頃にか有けむ。水無月の末つがた暴雨せしに。神なりひらめき。四面晦冥したりしが。やがて本城近きあたり雷の落ちりしに。そのひびきおびたゞしかりしかば。御前ちかくさぶらふ小姓。小納戸等もみな色をうまなひてひれふし。人こゝろもなくなりぬ。御側の衆はじめ直廬に侍らひし人々も。かれて雷地辰忌せたまふまゝ。いかにおどろかせたまふらんといそぎ

御前にはしり参りたれば。侍臣等はみな俯伏してあるなかに。公のみ常の御さまにて。御まとの上に端坐ままし〜ける。輕き時は思せさせたまふもの。かくつよき時に至り正しくましませしとは。いづれも驚感し奉りしとぞ。公好古の御志もまし〜て。延享四年奥右筆繪川入右衛門親雄が家に。先祖彦左衛門親照が時より傳へたりし代始和抄を召て御覽じたまふ。また笏の古製を搜索せられ。其頃田安右衛門督宗武卿はさる有職にておはしければ。特旨もて考へ奉らしめたまふ。卿古書を檢索せられ考ふるところのといもいまだ聞えあげずして。公昇進したまひければ。卿もふかくなげかれ後にその考へられし説を繕寫し。三絲山の 靈廟に

進薦せられしとぞ。寶曆のころ御庭のかたにつかふまつりし下吏の。ちかきころまでながらへしが物語せしは。凡延享寶曆の間は。御庭のといとすくなくて。朝毎に御庭に入て灑掃するのみ。さらに樹石を移しかへらるゝともなし。たまさかに花木を植らるゝか。または花の枝など手折とありて御庭に參れば。いつも小納戸の人めして菓子などたまひ。奥深く坐して御覽じおはしましけるまてとぞ。吾ともがらの小吏はいかにもつかふまつりよきときにて。御庭にさへ出れば。たゞ有がたき事とのみおもひ居たりと落涙してかたりぬ。これ瑣々たるといへども。その清淨無爲の御ありさまおして奉り奉るべきなり。

徳川實紀第六編畢

續國史大系第十四卷畢

明治卅六年七月五日印刷
明治卅六年七月十日發行

發行者

東京市京橋區彌左衛門町七番地
合名 經濟雜誌社

右代表者社員

西島政之

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社秀英會々員

印刷者

佐久間衡治

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英會









